あるバイオリニストの悲劇と国民性について

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

巨大な山容を見せるデナリ山（マッキンリー山）は、高緯度による低温・低酸素の過酷な条件下にある。1970年夏、植村直己さんは単独初登頂を果たして世界初の五大陸最高峰登頂者になったが、このときのアメリカ側と日本側の対応の違いが、それぞれの国民性をよく表している。1984年、再度マッキンリーに挑んだ植村さんは、厳冬期単独初登頂に成功後、翌日の交信を最後に消息を絶った。（デナリ国立公園ワンダーレイクから撮影）

ガルネリ押収事件

先日、ベルギー在住の日本人女性バイオリニストが独フランクフルト空港の税関で、手荷物として所持していたバイオリンの名器「ガルネリ」を密輸の疑いで押収されるというニュースがあった。ストラディバリウスと並ぶ名器といわれる彼女のガルネリは1億円はくだらないもので、驚くべきことにドイツ税関から19万ユーロ（1,900万円）を支払うよう求められているという。ドイツ国民の環境問題などに対する意識レベルの高さに、日頃わたしは尊敬の念さえ抱いているが、今回はドイツ人の融通の利かない官僚主義的な一面を露呈させた事件といってもよいだろう。

わたしがこのニュースで思い浮かべたのは、ヨーロッパ「地獄の取り合わせ」と言われる諺である。イギリス人のシェフ（味音痴で言わずもがな）、フランス人の政治家（おしゃべりばかりで先に進まず）、ドイツ人の警官（あまりに融通の利かない怖いイメージ）。これが最悪の取り合わせだそうで、なんとなくわかるであろう。ちなみに最良の取り合わせは、イギリス人の警官、フランス人のシェフ、ドイツ人の政治家と言われている。

今後、バイオリン押収の成り行きはどうなるか分からないが、彼女の言い分は「これまでバイオリンを常に持ち歩いて何度もフランクフルト空港を通関したが、何も問題はなかった」ということである。高級品の申告を怠って思わぬ課税が課せられることはよくあるが、相手が著名な音楽家であり、自身の愛器を密輸しようとしたなどというバカげた疑いはすぐに晴れるはずだけに、ドイツ人がどういう答を出すか結果が注目されるのである。

例えばこれが米国であったならどうであろうか。有名バイオリニストと分かった時点で、事の次第を理解されてすぐさま返還されるのではないだろうか。日本人はどちらかと言うとドイツ人に近いものがあって、何より規則に忠実であることが求められるが、世間の評価に揺れ動くきらいがある。（この点、わたし自身はもちろん、周囲の多くの人に当てはまる日本人気質ではなかろうか）

日本人とアメリカ人の違いを表す事例

日本人とアメリカ人の違いが、パイオニア・ワークに対する理解度に顕著に現れた事例がある。1968年、植村直己がアラスカのマッキンリー（デナリ山）に挑戦しようと単独での登山の申請を出したところ、四人以下の登山は許可しないという規定があって、国立公園局に拒否されたことがあった。1970年、その年の5月に日本人として初めて世界最高峰エベレストの頂上に立った植村は、すぐさまアラスカに向かい、再度マッキンリー単独登山の申請を公園局に出して自身の経歴を説明したところ、局長の裁量で特別に許可された。ところが日本領事館では、アメリカの規則に従わないとは何事かという空気で、領事に説明しようにも面会すらできなかったという。マッキンリー単独初登頂に成功後、公園局長などアメリカ側関係者が世界初の五大陸最高峰登頂者となった植村の偉業を讃えてパーティーを催してくれたが、市などによる出席要請にもかかわらず日本領事館関係者は誰ひとり出席しなかった。局長による特例という措置に対し、日本領事館側はかたくなに規則違反を犯した日本人を讃えることはできぬという見解であった。領事らの日本的官僚主義に凝り固まった態度は、われわれ日本人はあちこちで経験する事例でもある。そしてまた国民的英雄になった後の植村さんであったなら、まったく違った待遇を受けたであろう事は間違いない。

もうひとつ日本人とアメリカ人の違いを表す身近な例として、わたしがかつてのSRF広報紙“錨”編集長F女史から直接聞いたエピソードがある。1960年代、広報室カメラマンU氏がにアフリカ横断登山隊に参加したときのこと。アフリカ遠征計画を聞いたSRF司令官はさっそく将校たちに号令をかけ、カンパを募ったりして大いに応援したが、日本人サイドは冷ややかに眺める人が多かったという。この登山隊の成果はU氏の素晴らしい写真を中心にした立派な本になって残されたが、何ヶ月もの長期休暇を取ってこうした行動をすることによい感情を抱かない人が、日本人のなかには案外多かったのである。みなが同じ行動をすることをよしとするニッポンメダカ社会では、目立ったり特別な行動をとることは忌み嫌らわれるという、興味深い一例だと思う。

国民性を表す小話

最後に欧米各国や日本の国民性を表す小話を紹介しよう。ご存知の方も多いだろうし、また各バージョンで多少の違いがあるようだが、はじめて聞く人はみな膝を叩くこと請け合いである。

沈没しそうな船があり、たくさんの乗船客に対しボートの数も足りず、子供や女性を優先させなければならない。したがって男たちには自ら海に飛び込んで欲しいのだが、どう言ったら自分から海に飛び込んでくれるように仕向けることができるか。

アメリカ人なら事は簡単「飛び込めばあなたはヒーローになれますよ。」

イギリス人なら「こういうとき、紳士は飛び込むものです。」

ドイツ人には「規則では飛び込むことになっています。」

日本人に対してはやはり「みんな飛び込んでます。」

陽気なイタリア人には「先ほど美女が飛び込みました。今飛び込めば追いつきますよ。」

そしてこれはフランス人を飛び込ませる為のひと言。

「飛び込まないでください！」

横須賀市イベント情報

くりはま花の国コスモスまつり

場所：　くりはま花の国（横須賀市神明町1-1）
交通：　JR久里浜駅、京急久里浜駅から徒歩15分
　　横浜横須賀道路佐原I.C.より車で10分。第1・第2駐車場あり
入園無料（フラワートレイン、パークゴルフ場等一部有料）

コスモスまつりイベントスケジュール

9月8・15日　10:00～
　コスモス園前広場で先着100名に花の種プレゼント。（荒天中止）
9月22・23日　11:00～15:00
　ハーブ園でハーブティ試飲、各種体験。（一部有料）。ハーブ苗・ハーブティ・グッズの販売。
9月29日　10:00～15:00
　フラワー&トロピカルダンスカーニバル（雨天中止）南太平洋ポリネシアンダンスのショー。コスモス園前広場特設ステージにて。
9月30日　10:00～15:00
　フラワーヘブンダンスフェスティバル（雨天中止）ヒップポップとチアダンスのショー。コスモス園前広場特設ステージにて。
9月29・30日　12:00～13:00
　働くわんちゃんのデモンストレーション（雨天中止）補助犬・盲導犬・聴導犬などのデモンストレーション。コスモス園前広場特設ステージにて。
10月6日　10:00～16:00
　フリーマーケット（雨天中止）コスモス園前広場にて。
10月6日　10:00～15:00
　太鼓の祭典inくりはま花の国（雨天中止）各種太鼓のショー。コスモス園前広場。
10月20・21日　10:00～15:00
　久里浜花の街フェアー秋（荒天中止）地元物産・ミニ縁日・各種ショー。コスモス園前広場にて。
10月21日　9:00～16:00
　パークゴルフコスモス杯（荒天中止）花の国パークゴルフ場にてコスモス杯を開催。上位入賞者には景品あり。参加費2000円。要予約。先着120人。受付は8:30から。